

【本日のアンコール】

ヒューバート・パリー作曲 『イエルサレム』 《エルガー編に基づく大浦智弘管弦楽版》 (Sir Charles Hubert Hastings Parry : Jerusalem)

プログラム解説にも書いた通り、パリーの代表作であり、“ラスト・ナイト・オブ・プロムス”でほぼ必ず演奏される、愛されている作品、18世紀イギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの予言詩『ミルトン』の序詩による合唱曲。イエス・キリスト(神の聖なる子羊)が古代イングランドに来たという伝説をふまえた詩であるが、そこに語られているのは、あらゆる権威や権力に屈することのない自由な精神活動を続ける事の決意宣言。

「パリーの交響曲を演奏するなら、やはりアンコールはこれしかない！」という声から選んだのだが、“自由な精神活動”というあたり、世間の評価に惑わされず演奏活動を行う当団のコンセプトにも通じるものがあるのではないか、とも思う。本日は、よく演奏されるエルガーによる管弦楽伴奏版を基に、当団正指揮者の大浦智弘氏が管弦楽のみで演奏できるよう手を入れた版により演奏した。

オーケストラ 《エクセルシス》

古代 あの足が
イングランドの山の草地を歩いたというのか
神の聖なる子羊が
イングランドの心地よい牧草地にいたなどと

神々しい顔が
雲に覆われた丘の上で輝き
ここに エルサレムが 建っていたというのか
こんな闇のサタンの工場のあいだに

私の燃える黄金の弓を
希望の矢を
槍を私に ああ立ちこめる雲よ消えろ
炎の戦車を 私に与えてくれ

精神の闘いから私は一歩も引く気はない
この剣を私の手のなかで眠らせてもおかぬ

我々がエルサレムを打ち建てるまで
イングランドの心地よいみどりの大地に